

第1回竹原市県立高等学校在り方検討委員会 議事録

- 1 開催日時 令和6年5月20日（月）19:00～20:45
- 2 開催場所 竹原市役所3階 第1・2委員会室
- 3 出席者 検討委員会委員9名、オブザーバー1名、市長、教育長、企画部長、教育次長、教育委員会参事、事務局
- 4 協議事項
 - (1) 委員長及び副委員長の選任について
 - (2) 竹原市内の県立高等学校在り方検討委員会の設置経緯、目的及び今後のスケジュールについて
 - (3) 竹原市の教育理念（素案）について
 - (4) 中学生・高校生等へのアンケートの実施について

（事務局）

皆様、本日は大変お忙しい中、遅い時間にお集まりいただきありがとうございます。

定刻となりましたので、ただいまから第1回竹原市内の県立高等学校在り方検討委員会を開会いたします。

委嘱状の交付につきましては、本来皆様の席を回って直接交付すべきところですが、今回は机上配付にて委嘱状を交付しておりますので、ご理解くださいますようお願い申し上げます。

私は、竹原市企画政策課の平本と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まず、配付資料の確認をさせていただきます。

会議次第、委員名簿、配席図、資料1として竹原市内の県立高等学校在り方検討委員会について、資料1別紙として義務教育終了後の進学状況について、資料2として竹原市の教育理念について、竹原高等学校学校案内、忠海高等学校学校案内、資料3として中学生、高校生等へのアンケートの実施についてとなっております。

資料のない方はいらっしゃいませんか。

それでは、お手元に配付いたしております会議次第に沿って会議を進めさせていただきます。

本日の終了時刻は20時30分を予定しております。

なお、本検討委員会は原則公開とさせていただくとともに、議事録につきましては発言

者名を伏せ、編集の後、竹原市ホームページにて公開させていただきますので、ご了承ください。

また、会議の冒頭に事務局で写真を撮らせていただきます。本市の広報や報道機関から要望がありましたら提供させていただく予定としておりますので、あわせてご了承ください。

それでは初めに、市長の今榮からご挨拶申し上げます。

(市長)

皆さん、こんばんは。

第1回の竹原市内の県立高等学校在り方検討委員会の開会に当たりまして一言ご挨拶を申し上げます。

皆様には平素から竹原市政の推進につきまして格別のご理解とご協力を賜っております。心より感謝を申し上げます。また、この度はご多用にも関わりませず本検討委員会の委員をお引受けいただき、また本日は遠方より難しい時間にもかかわらずお運びをいただきまして、重ねて感謝を申し上げる次第でございます。

さて、本市には2つの県立高等学校がございます。近年の少子化の影響もあり、定員割れが続いている状況にもございます。高校進学時に市外に出ていく状況にある教育環境は、シビックプライドの醸成や人口減少に影響を及ぼすことが懸念されておりますことから、このたび本検討委員会を設置いたしまして、本市に所在する県立高等学校の今後の在り方等について皆様に検討をお願いすることといたしました。皆様にとりまとめていただいた検討結果につきましては、市として要望書にとりまとめまして広島県教育委員会に提出することとさせていただきます。

非常に難しい検討内容であると十分承知しておりますが、第6次竹原市総合計画にあります将来像の一つでございます「「文教のまち竹原」の精神を受け継ぎ、地域を支え、世界中で活躍する人々を輩出するまち」の実現に向けて様々な施策を、また取組を推進をしてまいりたいというふうにも考えているところでございます。何卒この度の検討委員会における検討につきましてどうぞよろしくお願い申し上げます。

委員の皆様には、今後数回にわたるご検討をお願いする、会議の出席をお願いすることとなりますが、委員それぞれのお立場から忌憚のないご意見を賜りまして、活発な議論を展開していただき、実り多い会としていただくことをお願いいたしまして、甚だ簡単ではご

ございますが、本日お集まりの皆さんへのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

(事務局)

ありがとうございました。

それでは、委員の皆様を名簿の順番にご紹介いたします。

周南公立大学教授 伊藤 敏安 様、

広島経済大学教授 胤森 裕暢 様、

元広島県立高等学校校長 藤本 秀穂 様、

広島大学准教授 米谷 剛 様、

竹原市子ども・子育て会議委員 柄崎 佳之 様、

吉名学園学校運営協議会会長 竹安 幸代 様、

竹原市PTA連合会副会長 益盛 直美 様、

竹原商工会議所主任経営指導員 平元 裕子 様、

一般社団法人竹原青年会議所第59代理事長 藤川 裕員 様、

以上の9名の皆様に加え、現在教育委員をしておられます平田和也様に委員に加わっていただく予定としておりまして、本日オブザーバーとしてご参加いただいております。

なお、平田様は教育委員の任期が6月20日までとなっておりますので、教育委員退任後に検討委員に加わっていただく予定としております。

次に、竹原市からは、今榮市長、高田教育長、國川企画部長、沖本教育次長、大橋教育委員会参事、五反田総務学事課教育総務係長となっております。

それでは続いて、協議事項に入らせていただきます。

委員長が選任されるまでの間、検討委員会設置要綱附則第2項により、今榮市長に議事進行をお願いしたいと思います。

(市長)

それでは、失礼いたします。

協議事項の委員長及び副委員長の選任に移らせていただきます。

検討委員会設置要綱第5条により、委員の互選によることとなっております。事務局のほうから腹案といたしますか、提案させていただければというふうに存じておりますけれ

ども、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

ありがとうございます。

それでは、事務局のほうから腹案の提案をさせていただきます。よろしくお願ひします。

(事務局)

それでは、まず委員長につきましては、本市の市立学校適正配置懇話会の答申及び教育委員会事務点検評価報告書の取りまとめ実績がおありになります胤森委員にお願いしてはどうかと思います。

また、副委員長については、竹原市総合計画審議会会長として第6次竹原市総合計画の策定等に深く関わっていただいております伊藤委員にお願いしてはどうかと思います。

以上でございます。

(市長)

ただいま事務局のほうからご提案をさせていただきました。

皆さん、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

〔「異議なし」と呼ぶ者あり〕

ありがとうございます。

それでは、ご異議がないようでございますので、胤森委員様に委員長を、伊藤委員様に副委員長をお願いしたいというふう存じます。

それでは、それぞれ一言ご挨拶をお願いできればと思います。よろしくお願ひいたします。

(委員長)

恐れ入ります。広島経済大学の胤森と申します。

このたびは、委員長という形で皆様の密度の濃い会議になりますように努めてまいりたいと思いますので、よろしくお願ひ申し上げます。

(副委員長)

伊藤でございます。

総合計画審議会に続きまして、またよろしく願いいたします。

(市長)

それでは、これからの議事進行につきましては委員長をお願いいたします。

(事務局)

申し訳ございませんが、市長は公務につきここで退席させていただきます。

(市長)

それでは、新たにご就任いただきました委員長、副委員長に委ねたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。それでは失礼いたします。ありがとうございます。

(委員長)

では、続きまして次の協議事項に入らせていただきたいと思います。

竹原市内の県立高等学校在り方検討委員会の設置経緯、目的及び今後のスケジュールにつきまして、事務局からご説明をお願いいたします。

(事務局)

それでは、協議事項(2)、竹原市内の県立高等学校在り方検討委員会の設置経緯、目的及び今後のスケジュールにつきまして、資料1でご説明をさせていただきます。

まず、「1 設置の経緯」につきましては、近年少子化に加え市内の中学校、義務教育学校の卒業者のうち約7割が市外の高等学校に進学しており、市内にある2つの県立高等学校は生徒数の減少によって定員割れが続いております。

その具体的な状況につきましては、資料1別紙の「義務教育終了後の進学状況について」でご説明をいたしますので、資料1別紙をご覧になっていただければと思います。

まず、(1)と(2)の区分と(3)の区分で高校側から見るか中学校側から見るかの違いで表記が異なっておりますが、縦の列で対象者は同じとなっておりますので、そのようにご理解をお願いしたいと思います。

この表の見方でございますが、まず、(1)につきましては、一番右側、令和6年の列

でご説明を申し上げますと、令和6年4月に市内高等学校進学者は43人、網かけをしております。その43人ですが、対象となった令和5年度に市立中学校もしくは義務教育学校を卒業した生徒は160人で、進学割合は26.9%となっております。

この進学割合につきましては、令和元年の39.2%から年々低下傾向にあり、令和6年は令和5年から多少持ち直したものの、令和元年と比較して12.3ポイント低下しております。

(2) につきましては、市内高等学校進学者43人のうち、竹原高校の普通科と商業科、忠海高校にそれぞれ進学した人数と定員割れの人数となっております。

(3) につきましては、卒業生160人のうち、市内の高等学校に入学した生徒43人以外の進学先の状況とその人数となっております。

我々といたしましては、(1) が大きな課題であると捉えております。

資料1へ戻っていただければと思います。

設置の経緯の説明の続きとなりますが、高校進学時に市外に出ていく状況にある教育環境は、シビックプライドの醸成への影響が懸念されるとともに、人口減少につながる要因にもなっていることなどから、現状の改善を図ることを目指し、市として取組を行うことといたしております。

「2 目的」につきましては、市内の高等学校教育について、設置の在り方や教育内容、魅力の向上策など、地元進学を望む生徒が増える方策を検討し、その結果を市に報告するものでございます。

「3 市における対応の方向性」につきましては、検討委員会の報告を基に、市内の県立高等学校の今後の在り方について要望書を取りまとめ、県教育委員会に提出するとともに、県教育委員会と協議し、その実現を図っていかうと考えております。

続きまして、「4 取組スケジュール(案)」について説明をいたします。

「(1) 第1回会議開催」につきましては、本日の会議でございます。

内容につきましては、本日の次第のとおりでございますが、この後の協議事項となります。「ウ 竹原市の教育理念」につきましては、素案を示させていただき、ご検討をしていただきます。また、次の「エ 中学生・高校生等へのアンケート実施」につきましては、この検討委員会において協議するための基礎資料として活用するため、アンケートを実施する予定としております。アンケート内容について素案を示させていただき、ご検討をしていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

「(2) 第2回会議開催」につきましては、8月頃に開催する予定とし、その内容につきましては、「ア 竹原市の教育理念」については引き続きご検討していただきます。

「イ 中学生・高校生等へのアンケート実施」につきましては、アンケート内容について決定したいと考えております。次に、「ウ 市が求める高校教育の環境について」は、先ほど目的でご説明をいたしました市内の高等学校教育について、設置の在り方や教育内容、魅力の向上策など、地元進学を望む生徒が増える方策をご検討いただこうと考えております。

「(3) アンケートの実施」につきましては、9月頃を考えております。

「(4) 第3回会議開催」につきましては、11月頃に開催する予定とし、その内容につきましては、「ア 竹原市の教育理念」につきましては内容の決定を行い、「イ 中学生・高校生等へのアンケート結果」については、結果について報告をさせていただきます。「ウ 市が求める高校教育の環境」については、決定した竹原市の教育理念とアンケート結果に基づき、引き続きご検討を行っていただく予定と考えております。

「(5) 第4回会議開催」につきましては、令和7年3月頃に開催する予定とし、「ア 市が求める高校教育の環境」についてご検討を行っていただくとともに、「イ 市への報告書のとりまとめ」についての素案を示し、とりまとめに向けてご検討を行っていただく予定と考えております。

「(6) 第5回会議開催」につきましては、令和7年5月頃に開催する予定とし、市への報告書について最終的にとりまとめを行っていただこうと考えております。

検討委員会のスケジュールにつきましては以上であります。この後は、検討委員会が提出した報告書に基づき、総合教育会議において県教育委員会に提出する要望書を作成し、令和7年6月以降に提出できればと考えております。

こうしたスケジュールにつきましては、あくまで現時点の案と考えております。ご検討の状況によっては見直しが必要な場合も想定されますので、その際は委員長と相談させていただいた上で、適宜見直しを行う場合もあると考えておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

説明につきましては以上です。

(委員長)

ありがとうございました。

ただいまの事務局からのご説明について、皆様のご質問やご意見をお願いいたします。

なお、せっかくですので、大事な協議を深めてまいりたいので、ぜひ全員が、この会議の中で一度は必ずご発言いただければと思っております。

それでは、今のご説明につきまして、ご質問、ご意見をお願い申し上げます。いかがでしょうか。

(委員)

スケジュールについてなんですけれど、やはり事実に基づいてこれからのあるべき姿を描くとすれば、例えば11月の第3回でそれがはっきりするという予定になるのかなというふうに理解をしたんですが、議論をする機会というのが少し時間的にどうなのかなと思うところではあるんですが、その辺の事務作業なり、そういったところについて何か。9月にアンケートを実施し、11月にアンケート結果を報告することについて、どうなのかなと思うところがありますが、いかがでしょうか。

(事務局)

委員の皆様にご検討していただくための材料として、いろいろな意識調査、アンケートを行って、その結果に基づいてご検討をと考えております。アンケートの内容を集計する時間が多少必要というところで、9月のアンケート実施から2か月たった後に、ご検討のための会議をと考えておりますが、検討する回数が会議を行っていく中で少ないということになりますと、先ほど申し上げましたようにスケジュールの見直しも考えております。

ただ、この度、この検討に至った経緯というんですか、課題というのは非常にスピード感を持って解決する必要があると思っておりますので、そのスピード感の部分スケジュールのほうへ落とし込んでいくというところで、この度のスケジュール組みにはなっております。現実的に今後進めていきまして状況が変わった場合は、委員長さんと相談させていただきながら適宜見直しも含めて考えてまいりたいと考えております。

(委員長)

よろしいでしょうか。

(委員)

ありがとうございました。

(委員長)

そのほか、ぜひお願い申し上げます。

(委員)

スケジュールではなく内容に関わってくるんですが、中高生、あるいはその保護者へのアンケートっていうものが、検討していく材料になってるんですが、それ以外の検討するための要素というのは何か考えておられますか。

(事務局)

検討するための要素は、まずはアンケートを考えているんですが、その他といたしましては、本日、事前に委員さんのほうから意見もあって、資料として高校のパンフレットを付けさせていただいております。そのように、検討に必要な事項がありましたら、どこまで提供できるか分からないんですが、この委員会の中で言ういただければ、我々も次の会議に向けて準備をさせていただこうと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。

(委員)

分かりました。

(委員長)

本日お配りいただいていて、既にお目を通してこられたアンケートについても後ほどご議論いただくこととなりますが、これを持ち帰りながら、次の会議を目指してしっかりと方策について深めていければなと思います。

そのほか、ぜひご意見をいただければと思います。

(委員)

1点、気になったところがあります。竹原市内の高校へ生徒さんがたくさん来ていただけるような状況をとということでお考えになられているかと思うんですけども、その際、地元のお子さんがターゲットになっているんですか。市外に住まわれているお子さんもぜ

ひ竹原の高校に来てもらうというような観点から持っていくと、ちょっとアンケートが竹原市内の中学生や高校生だけのアンケートでは、これは材料が足りないんじゃないのかなというふうに考えてしまいました。

以上です。

(事務局)

ターゲットというんですか、この会議の冒頭の市長の挨拶の中にもありましたように、課題としては地元の子供たちが義務教育終了後に市内の高校へ進んでない、このことがシビックプライドの醸成への影響が生じている、または市内で義務教育が終わった後に高校まで進学したいという環境にないため、人口減少の要因にもなっているということがあります。まずは地元の子供たちがしっかり進学していただくような、そういう魅力ある高校をつくっていけば、その2次的なもので外からも生徒が呼び込めるんじゃないかというような考えを持っています。まずは地元の子供たちに訴求するような、そういった高校になるのが望ましいのではないかと考えております。よろしく願いいたします。

(委員長)

そういうお答えなんですけど、いかがですか。

(委員)

それではちょっと。

やはりそう考えてしまうと、どうしても人口減少というもののスピードのほうが速いので、追いつかないのではないのかなというふうに私はちょっと危惧いたします。

(委員長)

いかがでしょうか。もう少しご説明を。

(事務局)

次の協議事項である資料2のほうで、竹原市で義務教育を終了した後の18歳まで貫く教育理念について素案を示しております。竹原市の教育で、どういった子供を育てていくかというところで、最終的には市外の子供たちも集めて育てていくという形になるかと

思いますので、市外の子を全くターゲットとして考えていないというわけではなくて、まずは地元の子が進学するような学校にすることによって、市外の子たちも惹きつける、そういった高校教育を目指す内容の教育理念を考えておりますので、そちらも含めて、次の協議事項での説明も聞いていただければと思いますので、よろしくをお願いします。

(委員長)

よろしいでしょうか。

シビックプライドとか地元進学とか、あるいは後ほどご説明があるんだと思うんですが、資料2にも「地域」、「たけ学」など、いろんなキーワードがあります。そういった形で焦点を絞りながら、地元進学というところを起点にしながらアンケートも進めていくということになる中で、さらに他地域へ二次的にいろいろといい影響がしっかりと伝わっていけばいいという、そういうお考えのように受け止めました。

そのほか、お願いします。

(委員)

先ほどの委員の意見、とてもよく分かります。そうだそうだと思いました、私も。

地元の子が少ないといってもゼロではなく、実際、行ってる子がいるのです。その子たちが今2つの県立学校に行ってどう思ってるのか、それもアンケートしてほしいと思うんです。行った子が次の後輩に、「ええで、来いや。」と言ってくれるかどうかですよ。そこは重要だと思います。自分の進路を、あの15歳の未熟な子たちが決定するのは、親か友達か塾か、そういったところが大きいと思います。その3分の1の確率で、先輩が「ええで、来いや。」と言えるか言えないかだと思うんです。そこをアンケートでとってほしいなと私は思いますけど、いかがなものでしょうか。

(委員長)

現在、竹原の2つの高等学校に通ってくれている生徒さんたちにアンケートをとる、それは他地域からの生徒さんも含めての話ですか。それとも、竹原市で学んでそのまま竹原市の2校に通っている生徒さんに絞ってということですか。

(委員)

同じアンケートをとるのなら、絞るより全員にとってもらったほうが、確率的にたくさん
の意見がとれると思います。たまたま竹原市に住民票があるかないかだけで、その高校
に魅力があるかないかは大きな点だと思います。

(委員長)

いかがでしょうか。竹原市の2校に他市から来ている生徒さんたちにも一緒にというお
話ですが。

(事務局)

そこは検討させていただこうと思います。

(委員)

これは高校の協力がないととてもできるものではないと思いますので、もしそういう話
が出たら高校、校長先生の協力がとれるかどうかについて、どのようなものなんでしょう
か、参考として。

(委員)

元校長ということで、現職ではありませんが、そういう要請があれば、私の見立てであ
れば高等学校は協力をするというふうに思います。ただ、そのときの時間的なものとかが
あるかとは思いますが、ホームルームなりを使いながら、そういった協力は、むしろ
360度評価をしていく、今いる生徒も、これから入るところの生徒も、いろんな
ところの評価を把握しておくというのが、高等学校のあるべき姿に近づいていくのではな
いかなと思いますので、高等学校側は協力をするようになると私は思っております。もし
そういうことの働きかけが必要ならば、何らかの方法で協力を仰いでいくというふうにし
たほうがいいと思います。

(委員)

ありがとうございました。

(委員長)

事務局のほうではいかがでしょうか。

(事務局)

先ほど検討すると申し上げたのは、高校側の協力の部分がちょっと懸念されたもので、そのように申し上げました。いずれにいたしましても、委員さんのご意見を参考にして高校側に協力していただけるかどうかも含めて、また、高校生全員に質問していくということになると、本日配らせていただいているアンケート案ではまだまだ薄い部分もあるかも分かりませんので、アンケート内容も含めて検討してまいりたいと思います。

(委員長)

そのほかに、この件につきまして、スケジュール等について、よろしいでしょうか。

(委員)

すみません。アンケート話が広がったので、先ほど言いかかっていたものを続けて言っていていいですか。

高校生に聞くのも大切だと思うんですが、その高校を卒業して、例えば成人を祝う会的なものを多分竹原市もされていると思います。当然、その基の名簿があると思います。その成人を迎える人たち、ないしは20歳を迎える人たちは、卒業してみて、一体どういふふうにいるのか。在校生は在校生としての思いはあると思うんですが、その学校を卒業して一体どういう思いを持っているかというほうが、何かもっともっとインパクトがあるんじゃないかと思うんですが、そういった、もう少し考えるための材料の幅を広げてはどうかと思うんですが、いかがでしょうか。

(委員長)

ありがとうございます。

これはまた後ほど、アンケートの実施について、具体的にご説明いただきながらというところになっていくと思うんですけれども、ひとまずもう少し幅を広げてというのはいかがでしょう。お答えいただけますか。

(事務局)

そうですね、こちらについても検討したいと思います。

(委員長)

では、この1つ目の協議事項につきましてはよろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

それでは、次の協議事項に入らせていただきます。

竹原市の教育理念につきまして、資料2、縦長のA3判の資料です。こちらのほうにつきまして、事務局からご説明をお願いいたします。

(事務局)

よろしくをお願いいたします。

今日はお仕事が終わった後、また大変遅い時間にお集まりいただきありがとうございます。

私のほうからは、資料に入る前に簡単に、学校教育の現状であったりとか本市の教育理念そのもののあたりを少し話をさせていただいてから、資料2の説明に入ろうと思います。

まず、竹原市では、義務教育として小学校が7校、そして中学校が2校、そして義務教育学校、これが前期課程と後期課程、要するに小学校と中学校が合わさった形の9年間一体でやっている義務教育学校が2校、計11校の学校で義務教育を展開しております。

現状といたしましては、学習指導要領というのがありまして、これが小学校、中学校が平成29年、そして高等学校が平成30年に新たに告示されまして、今までの求められる学力というようなところと少し角度が変わりまして、今は資質、能力という形で、子供たちにしっかりと資質、能力、生きて働く力をつけていこうということで行っております。

各教科はもとより、例えば国語だったり算数だったりっていうところでしっかりと系統性を持たせながら、この学年にはこの力をつけるというようなあたりを、これが指針ですので、全国のどの学校も、もちろん竹原市もこの学習指導要領に則って計画を立てて行っているところです。

あわせて、総合的な学習の時間というのがありまして、これは教科書はありません。ただし、方向性はきちっと明示されておりまして、例えばその子が住んでいる地域と一体となって課題を解決しながら、しっかりとそこで育むべき資質、能力はつけなさいよとい

うような指針もありますが、一体的に教科書がこれがあるということではありません。よって、竹原の小学校、中学校、義務教育学校もそれぞれ教科書はありませんが、年間指導計画をしっかりと立てて、例えば竹原西小学校であればハチの干潟を材にして勉強したり、吉名学園であれば特産であるジャガイモ、ここをメインに置いて系統性を持たせてやっているというような形で、要するに教科でつける力とそれ以外でしっかりとつけていく力というところを明確に分けながら、かつしっかりそこを横断的にしながら、今、教育活動を展開しているところです。

あわせて、令和4年度からは、入学する前の子供たち、つまり保育所やこども園の子供たちの学びと育ちを小学校でもしっかりとつなげていこうということで、幼・保小連携推進協議会というものを新たに竹原市として立ち上げました。これは、所管のほうは、義務教育はもちろん教育委員会なのですが、幼稚園あるいは保育所、そしてこども園は、健康こども未来課というところが所管になっていますので、両課でしっかり連携をとりながらつないでいこうというところで、今、行っているところです。

今は、実はそこまでです。こども園のところから義務教育の卒業の15の春まで、ここを見通して教育を立てているのですが、今日、今から説明させていただく資料2に書いてあるのは、プラス卒業後の、今話題になっている高校生、要するに高等学校の教育でこういうところを義務で培った力を積み上げることによって、18の春まで延長してしっかりと身につけさせることができるのではないかとというところで理念をお示しをしております。

ただ、所管課、要するに設置者は広島県教育委員会ですので、竹原がしっかりとニーズを上げていって、最後は広島県教育委員会、あるいは学校の校長先生というふうなところが理念を最後決定はしていくということなのですが、私が今から説明するのは義務教育までの力を踏まえて期待するといいますか、こういう高校が要るのではないかな、義務教育の子供たちが自信を持ってまた地元の高校を選ぶのではないかなというところにつくらさせていただきました。

先ほど、委員さんの方から地元の子だけで大丈夫ですかというところもありましたので、私のこの説明の中で少しそのあたりも触れられたらなというふうに思っております。よろしくをお願いします。

ということで、資料2は素案となっております。これはもちろん、先ほども言いましたように、学校教育の視点から私のほうでこういう理念でというふうに立てさせていただき

ましたので、説明の後で、委員さんの方からいろんなご意見をいただけたらというふうに思っております。

まず、上段をご覧ください。

上段に、「夢を持ち、多様な人々と協働し、社会を主体的に生き抜く人材の育成」、これを黄色の枠でこども園から高等学校の卒業までを貫いて横に示しています。これは、本市の第6次総合計画後期基本計画の中で、目標像2として設定しております学校教育の中の指針であります。もちろん、義務教育の中でも教育ビジョンを立てて、こちらの主体的に生き抜く人材の育成を掲げてやっておりますが、実はまだまだ義務教育が終わった後に、じゃあここはしっかり育成できているかというところがありますので、ぜひこの目標を高等学校18の春まで延長して、貫いて目指していけたらどうかなというふうに思って、横に貫いて目指す方向性を示しております。

そして一方、下の今度は黄色のほうを見ていただけたらと思うんですが、「地域とともに未来を切り拓く学校づくり」というふうになっております。これは、先ほど申し上げました学習指導要領の中には、社会に開かれた教育課程ということで、学校の中だけで完結するような時代ではない、地域や保護者一体となって子供たちの資質、能力を育んでいくということが明確に示されており、本市が先進的に取り組むコミュニティ・スクール、あるいは学校運営協議会、今日もたくさんの方に来ていただいておりますが、そういった子供たちと一緒に育てていこうというようなシステムがもう3年目になります。しっかり構築できておりますので、地域とともに未来を切り拓く学校づくり、ここを基本のベースとして、しっかりとベースに据えて上の人材の育成に向けてやっていこうということで、上下に挟み込んで貫くものを示しております。

じゃあ、子供たちに一体どういう力をつけていくかというのが、真ん中に2本の柱として設定しております自文化理解と異文化理解、この2本柱で今考えております。

まず、自文化理解というのが、これは仮称なのでまだ名前はこれからなのですが、竹原にちなんで「たけ学」というふうに設定しております。地域「たけはら」を生かした探求的な学び、「知る」、「かかわる」、「ふみだす」、「つくる」というふうに設定しております。先ほど冒頭に申し上げました総合的な学習の時間、つまりこれは教科書ではなくそれぞれの学校が地域や保護者と一体となって子供たちにつけていく、要するに体験を通してしっかりと子供たちに、？（はてな）、何でだろうっていうのを生み出しながらやっていく活動になるんですが、実は小学校、あるいは中学校では、この総合的な学習の時間

で実際に子供たちが地域の方と一緒に学習をしていくという体験を行っております。

そのため、小学校、中学校はここをベースにしております。プラス「つくる」というキーワードで、高等学校のほうにも入れておりますが、これは高校が「総合的な探求の時間」ということで、今回、新たに整理をされました。今までは、総合的な学習の時間で一緒だったのですが、義務教育で行った総合的な学習の時間で培った力を、今度は高校では「在り方、生き方」に照らしながら「総合的な探求の時間」というふうに設定をされましたので、ここをちょっと強みとして小学校まで積み上げた資質、能力をしっかりと高校の探求でもっともっと子供たちの実りある力につなげていけたらいいかなというふうに思いまして、そこは自らが創り出す、未来を創生するという意味で高等学校にも延ばした探求をしてみてもうかなというふうに思いまして、系統性のある「かかわる」、「ふみだす」、「つくる」というふうにしております。

また、「知る」という最初の段階は、もちろん小学校の低学年、あるいはこども園などでも、地域の散歩をしたりとか地域の自然を感じたりっていうことで、竹原ならではの活動も仕組んでおりますので、こういったところの系統性を一本化したカリキュラムをきちっと設定していけば、しっかりと今国が求めている探求の力、子供たちに養いたい資質、能力を竹原ならではの材を組み合わせることができるのではないかと、この「たけ学」ということを一本貫いて設定をしております。

あわせて、もう一方では、下にあります異文化理解ということで、これは小学校の中学年から主には始めております「TGG」というものを仕組んでおります。その中で留学生と一緒に「1DAY留学」をしたり、中学生をハワイに海外派遣し研修をさせたり、あるいは姉妹校締結をしておりますので、中学校の段階でいろんな他国の文化と触れ合う機会も設定しておりますので、これを義務教育だけで終わらせずに何とか高校にも延ばして世界で活躍する人材が輩出できるようなカリキュラムがつかれないかなということ、この自文化理解と異文化理解の二本柱でカリキュラムをつくっていくことがうちの強みではないかなというふうに思っております。

そして、高等学校のところを少し切り出したものが、下段の下にあります「竹原市が期待する高等学校像」というところです。

ここでは、現在、3割弱の子供しか竹原の市内の高等学校に行っていないというようなところもあったり、高校生の元気がもうちょっとあってもいいかなというような意見も聞きますので、「生徒や先生、学校自体がいろんなことにチャレンジできる学校」というと

ころをコンセプトに、先ほど言いました二本柱で組めていけたらいいのではないかなというふうに思っております。

委員さんが先ほどおっしゃったように、もちろん地元の子が今まで積み上げてきた竹原を材とした資質、能力はあるのですが、竹原市の強みとしてはかなり地域や地元の方がしっかりと応援、協力体制、バックアップができておりますので、ある意味、東広島や三原のような広いところではなかなか手が届かないキャリア形成であったりとか、高校生一人一人が自分なりの課題を見つけて、それを地域の課題と絡めながらやることで、恐らく他地域から来た子供たちもきめ細やかなそういった探求のプロセスを踏むことができると思います。きっと地元の子だけではなくて多方面から来た子供たちにとっても実りのある資質、能力をつけるだけの学力が身につくのではないかな、そこを期待して、先ほど次長が述べましたように、結果的にはいろいろな子供たちが竹原だったらああいうことができるというふうを選んでもらえる学校というふうなところも一つ言えるのではないかなというふうに思いまして、このように設定をしております。

簡単ではございますが、今、義務教育までで培った力をどうやったら高校につなげて、子供たちの力がそのまま魅力のある高校にスイッチできるか、つなげていけるかというところを説明させていただきました。冒頭申し上げましたように、教育の視点からの提案でありますので、委員の皆様からは、竹原のこれからのまちづくりであったりとか、それぞれの分野のあたりから多面的にご示唆をいただきながら、もっともっと竹原市の教育理念としてブラッシュアップできるのではないかなというふうに思いますので、忌憚のないご意見をいただければというふうに思います。よろしく申し上げます。

(委員長)

ありがとうございます。

それでは早速、ご質問、ご意見お願いいたします。

(委員)

非常に興味深く聞かせていただきました。

なかなか市の立場から県立高校の問題にここまで踏み込めるかというのはかなり微妙な問題を含んでるかと思えます。ただし、地方分権改革の一環として、国と地方とが対等、協力であると同じように、県と市、町も対等、協力、連携の関係であるということが明記

されています。そういった中では、市がこういった形で行いたい、そのビジョンにできる限り県立高校も協力していただきたいし、それを県と市が支え合っていくというスタンスが非常に重要だというふうに思いました。

そういった中で、18歳まで視野に置く、そういう中で県立高校について今後の姿なんですけども、こうあってほしいというのは非常に面白いし、今後県に対しても積極的にアピールできる材料になるかと思いました。

以上です

(委員長)

ありがとうございます。

そのほかに、いかがでしょうか。

(委員)

この「たけ学」、「知る」、「かかわる」、「ふみだす」、「つくる」とあるんですけど、現状、竹原から行っている生徒が43人で、それ以外の生徒というのは、この「つくる」というところからいきなり始まることになると思うので、「知る」というところのスタートから変わってくると思うんですが、そこに対して何かケアする方針だとか提案はどうなんでしょうか。

(事務局)

それぞれの市町によって、この総合的な学習の時間をどういうふうに組んでいるかというところが様々あるのですが、ある一定、先ほど申しあげましたように学習指導要領に則って行っておりますので、例えばその課題を見つけるとか、そこを解決するために自分ならどうできるだろうということを、場所は違えど経験している中学生だというふうに思っております。

ただ、竹原のことを知るという、委員が言われたように、そこはまたゼロからのスタートにはなりませんので、そういったところは「知っているだろう」のところから出発するのではなくて、「再度竹原を認識する」というような活動も恐らく必要になってくるとは思いますので、「現在の課題を、現状を分析する」というようなあたりで再度新入生の全員が、もう一回竹原を知っていくあたりのカリキュラムづくりというところは、工夫は必要

かなというふうに思っております。

(委員長)

いかがでしょうか。

(委員)

ありがとうございます。

そうしたところも踏まえて、やはり中高の連携もですけど、小学校の生徒が多分一番そういう地域のことを知っているのかなと思うので、そうした竹原の魅力を学びながら、それを竹原の地域の課題としてまず解決に導いてもらいながら、それが将来その子たちが卒業した後、自分の地域に帰ったときに生かせるような、そういった学習要領が組めるようになれば一番いいのかなと思います。中高ならず、もうしっかり小学生もすごくいっぱい頑張って勉強していただいていますし、活動的に動いていらっしゃいますので、そこら辺からまたちょっと見直していただいてもいいのかなと思います。一意見です。

(事務局)

委員がおっしゃったように、やはりそこで解決して終わりではなくて、「課題を解決してもまた次の課題を見つけて」という、このくるくるのサイクルが恐らく発達の段階ではありますので、小学生は小学生なりに、あるいは中学生は中学生なりに課題を持ちながらも、やはり高校生は自分自身の生き方とも比べながら、「あの時に解決できなかったあの問題が…」というようなことをしっかりキャッチして、竹原を離れても、「あの時の課題解決ってこういうところに役立つんじゃないか」というふうに、いつも疑問を持ちながら、また大学あるいは就職先でもやっていくというようなことが、この探求のプロセスである「たけ学」の中でしっかりと根づいていけるのではないかと期待もしております。これは県教委の皆さんとの相談なんですけど、カリキュラムづくり等のところでは工夫をしていきたいな、打ち出していけたらと思っております。ありがとうございます。

(委員)

よろしく申し上げます。

(委員長)

ある意味ウイークポイントのようにも見えて、何か大きなカリキュラムの非常にいい意味での連携推進が図れそうなお視点、ご質問だったと思います。

そのほかに、いかがでしょうか。

(委員)

高校にいた経験ということから2つ。

1つは、先ほどの総合的な学習の時間と総合的な探求の時間、これをつなげるということについては、かなり私の経験では難しいなと思います。その部分は何かというと、学習指導要領を離れて長いので変わってるかもしれませんが、そもそも学校独自のやり方があるというのが総合的な学習の時間の基本だったと思うので、それを一つの形にしていくということが難しい、まずそこを抜けていかないといけないというようなことです。

私も、ここに来させていただく前に、総合的な学習の時間をどうやってつなげるかということについて、その工夫ができればいいなと正直思ってここに臨んでおります。これは、教育内容の連結がとても大切だと思っているからです。その部分は、またこれから行政なりいろんなところの知恵を出し合いながら、それに向けてどうやってつなげていくかということを考えるべきだとは思いますが、つなぐのはなかなか難しいという経験、私は印象を持っているので、どこか新しい考え方で、スポンとだんごの串を刺すような何か、3兄弟みたいな小・中・高、3兄弟の串刺しをする何かをつくりたいなというふうには思っています。

2つ目は、上段のところにあります、いわゆる異文化理解ということについてのところでいうと、高等学校では世界で活躍する人材の輩出ということは、どうしてもよく出てくるタイトルなんです。それもそうなんです、もう少し一歩前の目標というものを私は設定してもいいんじゃないかなと。それは何かというと、地域のリーダーとなる人材を輩出するという。それが先ほど言われたような地域に帰ってくるということになるんです。

優秀な生徒を東京の大学へ行かせると、行ったら行ったきりで、どんどんどんどんところてん式に、せっかく広島県で育てた生徒が東京へ行くと帰って来ないんです。そういう事実をずっと毎年見てきて、じくじたる思いを私はしていたわけで、ある高校の校長のときにも、本校は地域のリーダーをつくるんだと、それを前面に出してやっていこうという

ことでしばらくやったことがあります、やはりそういったことを、この理念の中に言葉としてどこか入れていただきたいなど。やはり入るべきではないかなと。その先に世界でというのが当然あっていいと思いますが、階段の踊り場的にもう少し近いところの目標設定として、そういった世界で活躍するという前段階として地域のリーダーをどうやってつくっていくかだと思います。

そのために、「たけ学」も私はとてもいいと思います。何か内容を特化していくんじゃなくて、こういう「たけ学」で課題解決の方法論を学んでいく。教育内容として、内容ではなくて方法論を学んでいくというのがやはり重要なことじゃないかなと思います。その都度その都度必要となるものを、その方法論を有しながら解決していく。その解決はできるけどほかの解決はできないというんじゃなくて、やっぱり汎用性の高い方法論を。

だから、そういった意味では課題解決ということも必要ですが、私の経験では、その前に課題発見のほうがもっと重要だと思います。そこに課題があるということに気がつく力というのが解決よりも相当難しいというふうに思いますし、そのほうがむしろ重要ではないかなと。当たり前で暮らすのではなくて、先ほど言われたように疑問を持ったり、あれおかしいなというふうに思ったり、そういったところが課題発見力だと思います。解決の前の段階としての発見、それから、世界の前としての地域という部分が少し段階的に示していただければ、より竹原市がつくっているということが分かるのではないかなという感じがしました。

(委員長)

このポンチ絵というんですか、この素案にさらにそうした要素が組み込まれていく可能性がさらにあるという感じを、今持ちましたけども、そういったところもまた今後ご検討いただけるということになりますかね。

このあたりでまだご発言いただいていない委員の皆様、いかがでしょうか。

(委員)

2点気づいた点というか、自分の個人的な思いなんですけれども、自分は今の竹原の教育理念について、ちょっと若干1段階ずつ、場合によっては2段階高いのかなと。「知る」、「かかわる」、「ふみだす」、「つくる」の下にあるイメージで、小学校のところで、「解決イメージの提起」というのは、ちょっと自分の中でイメージが湧きづらいです

し、中学校の段階で「解決プランの提案」というのもちょっとイメージとして高いのかなとは思いました。

それからすみません、アンケートのところで発言しようかと思ったんですけども、自分の思いですが、資料3で(1)、(2)、(3)を対象とあるんですが、(3)のところで、高校1年生に進学した生徒180名というところで、恐らくこの中には、竹高、忠高に進学した生徒も含まれているってということと、ほかの地域、市外の高校に出た生徒も含まれると理解したんですけども、やはり中学生の意思決定の上で、(3)のところに保護者もぜひ入れていただいたほうがいいのではないかという気づきが1点。

それから、先般から上がっておりますが、忠高の入学者数の3分の1が竹原市内で、おおむね3分の2は市外から来ているとていうこともあるので、市外から見た竹原市内の高校の魅力というのを知るためには、やはり竹原市内だけの対象ではなく、市外から竹原市を選んで来てくれた人もアンケートの対象にすることによって、市外の人が竹原市の高校を選んだ理由、魅力という、自分たちでは気付けないものがひょっとしたら見つかるかもしれないというふうな思いがあるので、ぜひアンケートの対象のところに市外から竹原市を選んできてくださった生徒と保護者も加えていただいたほうがいいのではないのかなと思いました。

すみません、以上です。

(委員長)

ありがとうございます。

先ほどの協議の1つ目のところで、いろんな地域の若者たちの考えを広くという話がありまして、その一連の具体的なお話を頂戴したかなと思います。竹高生にとか、忠高生にとかという話も今いただいたかなと思いますし、後ほどまた具体的に整理ができるかなと思います。

ひとまず、資料2の教育理念の事務局のご説明についてご質問、ご意見等はよろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

では、続いてまいりたいと思います。

続いての協議事項「中学生・高校生へのアンケートの実施」について、事務局からご説明をお願いいたします。

(事務局)

中学生・高校生等への進路アンケートについてご説明を申し上げたいと思います。

資料3をご覧になっていただければと思います。

まず、「1 趣旨」につきましては、本日の協議事項(2)において既に説明している内容と重複するものでございますので、ここにつきましては省略をさせていただきます。よろしく願いいたします。

「2 対象」につきましては、(1)といたしまして、竹原市立中学校に属する1～3年生及び竹原市立義務教育学校に属する7～9年生の生徒で、人数としては現時点で409名を考えております。

(2)といたしましては、(1)の生徒の保護者で409名というふうには書いておりますが、兄弟関係もあると思いますので、実際はそれより少なくなると思います。

(3)といたしましては、市内に在住する令和6年4月に高校1年生に進学した生徒で、人数は現時点で約180名ということで把握をしております。

「3 方法」につきましては、対象の(1)については、学校において紙によるアンケート用紙を配布し、記入後回収を行うことと考えております。

対象の(2)につきましては、生徒にQRコードを印刷したアンケート用紙を配布し、ウェブ、つまり携帯電話を使って回答をしていただこうと考えております。

対象の(3)につきましては、QRコードを印刷したアンケート用紙を郵送し、WEBで回答していただこうと考えております。

「4 実施スケジュール」につきましては、協議事項(2)において説明したとおりでございますが、本日の第1回の検討委員会で、今この協議事項において、アンケート内容の素案を提案させていただいております。令和6年8月に開催を予定している第2回検討委員会におきまして、アンケート内容を決定し、令和6年9月にアンケートを実施したいと考えております。

それぞれのアンケート内容の案につきましては、見ていただいていると思いますので、説明は省略いたしますが、アンケートへの負担感を少なくして回収率が上がるようにということで、必要最小限の質問項目で案を作成しております。内容については不十分なところもあると考えております。本日は、委員の皆さんが今後ご検討していただく上で必要な情報収集のためのアンケート内容がありましたらご意見をいただければと思いますので、

どうぞよろしく願いいたします。

(委員長)

ありがとうございます。

先ほどの少しおさらいになりますけれども、この「2 対象」の(1)、(2)に加えて竹原高校や忠海高校に進学されている、市外からの生徒にも全体的にいろいろ聞いてみてはどうかというお話ですとか、それからもう一つは、この竹原市で晴れて成人式を迎えられる方々にも、いずれかの高校で学ばれて成人された方々にもアンケートをしてみてもどうかというご意見もあったかと思えます。

このあたりについては、先ほど事務局のほうから、今後検討していきたいという話ではあったんですが、我々のこの検討委員会としてはそのあたり前向きにご検討いただきたいということで、ひとまずはお預かりいただければなと思っております。

ゆえに、「2 対象」の(1)、(2)の内容について、さらに我々としては議論を深めてまいりたいと思えます。

事務局から、アンケート内容についてのご説明は特にございませんか。

(事務局)

はい。

(委員長)

では、改めてなんですが、2 ページ目からはこれは中学校1～3年生まで、それから義務教育学校でいえば7～9年生の生徒さんに対するアンケートということになります。

5 ページ目からは、その保護者の方々へ、QRコード等を配布してということになります。

そして、8 ページ目以降には、義務教育を卒業、修了された方に対するその後ということになります。

それでは、順番に見ていくのがいいのか、共通するところもあるので、まとめてご質問、ご意見いただくのがいいのか迷うところですけども、まずは典型的なこととして2 ページ目から4 ページ目までの中学校1～3年生、義務教育学校7～9年生の生徒さんに対するアンケートの内容について、ご意見いただく中で、以降のアンケートにもつなげてい

きたいと思います。

では、2ページ目から4ページ目までのアンケートについて、ご質問、ご意見等をお願いいたします。ご覧になられていかがですか。まだご発言をいただいてない委員の方、いかがでしょうか。

(委員)

私ごとですが、私の娘も忠海高校を卒業しておりまして、4年ぐらいは経つんですが、下の子は市外の高校に進学をしました。現在、義務教育学校にも1人通っている立場なので、このアンケートに本当に当てはまる対象者の子供を持つ親でもあります。

いつもアンケートを答えて思うことは、アンケートに対する回答がいつももらえないなというのを思っていて、回答はしても、それに対して、「こういう意見があったので、じゃあこうします」という回答までいただくことがないなというのをとても感じております。それはどのアンケートに対してもそうなんですけど、そういうのをきちんと、今後進学していく子供たちのためにもこういうアンケートを実施して、こういう回答を得て、こういう解決策です、というところまできちっと報告なりなんなりをしていただくということをちょっと申したいなと思っております。

この内容についてなんですけど、やはり望むこと、期待することはあるんですが、足りないこととか、こういうのがあったらいいなとか、そういうものも聞いていくといいんじゃないかなというの我也想います。先ほどもおっしゃってくださったように、やはり卒業生、竹原の高校を卒業した後の進学先とか、出てみてどうだったかとか、出てみてこういうところがやっぱり足らなかったなとか、そういうことも聞けるので、成人式等でそういう機会を設けるのはとてもいいことかなと思います。まさにうちも今年成人を迎える息子がいますので、そちらも対象なので、本当にどんぴしゃの関係者だなと思いながらとても興味深くお話を聞かせていただきました。

(委員長)

ありがとうございます。

事務局、お願いいたします。

(事務局)

アンケート結果につきましては、アンケートのリード文にも書いてありますように、検討委員会のほうに報告をさせてもらうとともに、ホームページ等で公開する予定で考えております。

それから、回答内容に対する対応ということでございますが、今回の取組が高等学校の設置者である県教育委員会に要望を出していくということで、最終的に市が実際に実行できるというものではございません。市は、要望書を提出するところまでを実行するという形になります。カリキュラムなどについても、今後、県教育委員会に求めるものとしていろいろ出されたとしても、最終的に高校のカリキュラムをつくるのは学校長ということもあります。最終的にどういった市内の高校であってほしいかという要望書を取りまとめるための参考資料ということでアンケートを実施しますので、回答に対する対応を一つ一つ市がどうするかというところについては、ちょっとご説明が難しいと考えておりますので、よろしく申し上げます。

(委員長)

成人される方へのアンケートというのは、今後の検討事項ですね。

(事務局)

そうですね。先ほどの協議事項(2)においても、アンケート対象についてもっと広げてはどうかというご意見を様々ないただいております。

実を言うと、このアンケートの集計などを業者などに委託して実施するなどの予算組みをしておりませんで、実際、我々職員が手作業で集計や分析などをしようと考えておりました。今後検討と言ったことについては、アンケートの集計や分析というのが、かなり事務量として多くなりますので、予算のところまで含めて検討させていただこうと思っております。すみませんが、ご理解をいただければと思います。よろしくお願いたします。

(委員)

すみません、これは今後のことになるんですけど、QRコードを使用してというと、多分Googleフォームによるアンケートを自分は想像したんですけども、そのときに例えば、高校1年生とその保護者にQRコードでの回答を求めるっていうことですけども、特に(2)については、QRコードを持って帰ったら、保護者は1名じゃなく2名回答す

るという重複回答の可能性も大いに考えられるので、予算がないと言われた直後に申し訳ないんですけども、そちらの対応についてもちょっと考慮しておく必要があるのかなと思いました。

以上です。

(委員長)

そのあたりの技術的なところ、ご検討になってください。

なお、2ページ目のリード文にあるように、今回は、検討委員会において協議する基礎資料という形でアンケートの結果が集約されて公開されていくというところの特殊性もあるかなと思います。

(委員)

よろしいですか。

気付きなんですけど、それぞれ中学生、高校生、それから保護者に共通項目を質問して、後で比較する相互のすり合わせという点では重要だと思います。

その中で、すごく気になったのが、どれも一緒なんですけど、3ページ目、問3について、希望する進路、これは、中学生、高校生に共通でいいと思います。これについては、第1希望、第2希望という順位付けを聞いていいと思います。

ただ、それ以降、問4、問5、それも高校生等も共通なんですけれども、順位付け回答しなくていいと思います。理由は、集計をすると複数回答、3つまで○(マル)といったことと結果として変わりません。しかも、回答するときに順位付け回答をすると、どうしても抵抗感があって考えなくちゃいけないんですけども、○(マル)を3つまでという具合につけるとすごくスムーズにできると思います。

お役所はこういった順位付け回答が好きなんですけれども、ほとんど使われてないんです。単に、かえって混乱する一因、さらに並べて混乱する恐れがあるので、単純に複数回答、○(マル)3つまでというようなやり方でいいと思います。

それから、先ほど来、議論があったんですが、対象として高校生の場合です。市内に在住して高校1年生になった方が対象なんですけど、これはやはり市外に進学した人、それから市外から市内の高校に進学した人に尋ねてもいいかなと思いました。もうほとんど項目が一緒ですので、工夫していただければと思います。

それから、実際に忠海高校のパンフレットを見ましても、これはたまたまなのか、こういう戦略、マーケティングなのか分かりませんが、全て市外の出身者の方の紹介がされますので、そういった意味でも市外から市内の高校に進学した高校生についても質問するというのはいいと思います。

そういったことがちょうど最後、10ページ目のところ、これは高校生です。入学してみても今の高校のイメージと合ってるかどうか。高校生は分かるかもしれないんですが、もっと直截に満足度というような形でも聞いてもいいかと思います。その次に、先ほど来、出ています、推奨、お勧めです。後輩に対して勧めたいかどうかというのを単純に聞いてもいいかなと思いました。

だから、そういったことでは、これは高校生、市外からの進学者、あるいは市外への進学者も含めて聞くし、もし予算等というか、事務方の手間暇の問題を考えれば、保護者についても簡単な質問を聞いてもいいかなとふと思いました。

以上です。

(委員長)

市外に進学させた保護者の方ということですか。

(委員)

いや、これはもちろん全員です。

(委員長)

さらに対象が広がるご提案もございましたが、またそれは事務局のほうでご検討いただきたいと思います。

(委員)

すみません、ちょっと度々で申し訳ないんですが、先ほどの3ページの間3のところ、簡単な印象とそれから意見なんです、A、B、Cというのは、これは本当に窓口そのものを出してますよね。このアンケートが竹原高校が人気があるのか忠海高校が人気があるのかと、そういうことを見るのであればこういう聞き方になるのかなと。こうじゃないともう食いつかないんですよね。ですが、市内なのか市外なのかということであれば、

ちょっとこれはむき出しの課程まで、普通科、商業科の違いまで書いて出す意図というものも少しよくよく慎重に見ておかないとどうなのかなと。アンケートで取りたいデータの最小限とおっしゃったので。であれば、市内なのか市外なのかが、今一つ焦点になっているのではないかなと思えばこそ、竹高の普通科なのか商業なのか、まずそれは一緒にいいんですけど、ましてや忠海と比較して少ないほうが負けよというような、何かそんな印象にもなりかねない、私はそういうふうにとったので、何のための選択肢なのかというのをちょっと検討をされたほうがいいのかというのの一つ。

同じ問3でいうと、例えばGのところは定時制・通信制とありますが、公立高校の定時制もあるんです。私立高校の通信制というのものもあるんです。だからこれは重複するんです。A、B、C、D、E、Fは、多分学校の型なんです。その中で、Gだけが課程なんです。全日制なのか定時制なのか通信制なのかという、学校種じゃなくて、学ぶ型なんです。だから、どうしても重なりが生じてしまいます。混乱はないのかなというふうに思いますが、高校にいる人間からすると何か曖昧だなというか、ちょっとむずむずしてくるような選択肢です。そういうところも、もし検討の余地があればしていただければいいのかなというふうに思います。

(委員長)

いかがでしょうか、今のご意見について、事務局として。

(事務局)

ご意見ありがとうございます。参考にして検討させていただこうと思います。よろしくお願ひします。

(委員長)

委員の皆様、ほかにはよろしいでしょうか。

(委員)

皆さんの話を駄目押しするようなんですけど、3ページの間4に、先輩が行ったからとかというような選択肢もあってもいいかなと思います。自分がどうやって行く高校を決定したかとか、自分の子供がどうやって行く高校を決定したかっていうのは、ここの部分は

大きいかなと思ってみたりします。高校を決定する気持ちというのは誰によって動かされるのかというのをここの中にやっぱり入れておくべきだと思います。

それから、もしかしたら県外に行く子もいるんじゃないんですか。私学とかそういうところまで入れてあるんだったら、県外へ行く子もいるかと思います。簡単にアンケートをとって、的確に私たちが欲しい情報を得ようとするのであれば、もうちょっと練ったほうがいいかなとも思いました。

それから、3ページ目の何々高校というのは、これを見たら高校現場の先生たちは一喜一憂して本当に大変だと思います。これが外に出たときに恐ろしいことになるというのは、もう見る限り、あなたたち何してくれたんだって言われても仕方がないような内容だと思うんです。今ここに出すというのが。ちょっと言おうか言おうかと思って、先ほど言ってくださったんでありがたかったんですけど、ちょっと私も思いました。

(委員長)

いかがでしょうか。まとめりよくというか、もう少し整理をして、尋ねたいことに焦点を絞って示したほうがいいのではないかというお話だったかなと思います。検討いただけるということでよろしくお願いします。

では、続いてどうでしょうか。

(委員)

今の問3のところ、現実問題として就職を選ぶ子はどれぐらいいるのかなと。中学生ですよね、中卒で働いている子、いないこともないとは思うんですけど、ここが要るのかなというところ。

それから対象のところ、先ほどから(3)の保護者も含めるという話が出ていたと思うんですけど、竹高、忠高の保護者。現状、竹原高校の特に今の2年生ですが、野球部がほとんど市外から来られているので、保護者に宛てるというのはちょっとなかなか難しい現状もあるかなと思います。僕は、竹原高校の野球部の寮生を預かっている立場で、やはり安佐南区とか離れたところから来ている子もいるので、保護者に宛てるためにどういう方法をとるかは検討が必要かなと思うので、そういったところも含めて検討していく必要があると思います。一意見です。

(委員長)

ありがとうございます。

(事務局)

就職という項目については、これからの選択肢として考えられるものということで入れておりますので、よろしくをお願いします。

また、就職をしている生徒がいるかどうかについては、個別の案件になりますので、回答は差し控えたいと思いますので、よろしくをお願いします。

(委員長)

全体的に、問3の整理、さらに絞り込みをという話であったかなと思います。

そのほかに、4ページまでのところでよろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

では、関連するんですけれども、今度は5ページから7ページにかけて、今度はその保護者です。中学校、義務教育学校の生徒の保護者に対するアンケートも同じような内容となっているんですけれども、いかがでしょうか。

既に何点か、ご意見に従ってそろえられるところが出てきているように思うんですけども、よろしいでしょうか。

皆様、いかがでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

では、続いてまいります。

8ページ目から10ページ目のそれですが、これにつきましてはいかがでしょうか。

先ほど、委員から10ページ目の問5について、書きぶりを少しというご示唆もあったんですが、いかがでしょうか。

また、私からなんですけど、まさに10ページ目の問5ですけれども、合っていない場合だけではなくて、合っていたのはどんなところなのか。それから、問6の意見のある方のみというのももったいないような気がします。自由記述で、何か我々にとってずばりの基礎資料となるような意見がもらえるかもしれませんので、そこはとってもいいのかなと。ぜひお書きくださいというように。

それからもう一つよろしいですか。

4ページ目、7ページ目、10ページ目、保護者アンケートについてはどうかと思えますけども、いずれにせよアンケートの回答のお礼と、それからシビックプライドとか、いい学校にするのでぜひ応援よろしく、というようなメッセージ性があってもいいのかなと思いました。

そのほかいかがでしょうか。

(委員)

では1点、これはちょっと修正箇所になるのかなと思うんですけど、問5の中のEの項目です。情報化社会の「化」の字が違うので。細かいところですけど。

それから、先ほど来、話に出ている対象者の件で、市外の人たちにもというところで、書き方がどうしても竹原市向けになっているので、もし本当に竹原高校、忠海高校の生徒全員に配るのであれば、このアンケートの冒頭の文章もちょっと検討が必要になるのかなという気がします。そういった方向性もちょっと検討していただくところで、シビックプライド、まちの誇りという、市外の子たちからすれば関係のないと言えれば関係のない話になってしまうので、竹原に興味ないよという子も高校生の中にはいる話になってくるので、その高校生に宛てた部分に関しては、少し書き方を変えるべきなのかなと思うので、そこを検討いただければと思います。

(委員長)

8ページ目以降について、全てを対象とするのか、それとも忠海高校と竹原高校2校の生徒さんたちへのアンケートはこれとは別建てにするのか、また深めていただければと思います。する、しないも含めてですけれども。いかがでしょうか。

では、そのほかにご意見はありますでしょうか。

(委員)

すみません、会議が、ほぼ最終的な段階になっていると思っていいですか。

アンケート以外で発言してもいいですか。

(委員長)

そうですね、今、アンケートを3種類見ていただいて、さらに対象を広げる中で、次

の別のバージョンも、あるいは字句の整理をもう少しとか、要点を絞ってというようなご意見をいただいたところで、アンケートの協議は大体出そろってきたところではございますが、皆さんいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(事務局)

いろいろなご意見をいただきました。アンケート調査がどのぐらいの作業量になるのかというのもありますし、提案させていただいた内容からはかなり対象者も増えますし、質問項目もそれぞれ考えないといけないので、次回の会議に提案では、9月のアンケート実施に間に合わない可能性もあります。委員さんには、アンケートの案を電子データで確認していただいたりというような対応をさせていただく可能性もありますので、ご承知おきいただければと思います。すみません、よろしく申し上げます。

(委員長)

皆様ご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、協議事項のアンケートについては以上ということにさせていただければと思いますが、そのほかにご意見等があればお願いいたします。

(委員)

今日、私は、学校運営協議会の立場から来させてもらって、資料2の中で、地域への関わり、課題発見と解決などが小学校、中学校でできるかなという意見もあったんですが、小学校、中学校でそれなりに課題解決の仕組みをカリキュラムを組んでやらせております。

私は吉名なんですが、しっかり課題解決をしています。子供は課題を見つけて、見つけたと言って喜んで、でも見つけただけじゃ駄目よ、解決しないとイケんよと。そして、解決しようたら失敗するんです。必ず失敗します。その失敗を乗り越えさせるというのもやって、成功させる体験を。見つけてうれしい体験、失敗してがっかりしたりする体験、そしてそれを解決した喜び、最後は成功体験に持っていくように、教委のほうに引っ張ってってくれる教員をつくっております。私たちがと言ったら大げさなんですが。やはり引っ張ってってくれる先生方が何も分からないで引っ張ってもいけないし、解決のしようもないので、学校評価委員、運営協議会の中で、その委員もしておりますので、地域の人

たちと一緒にあって、今、課題解決をしております。

これは、恐らく竹原市だけじゃなくって、やり方は分かりませんが、どの市町もこういうことをしなくてはならないようになってきていると思います。これから、今ここに座っている私たちが経験したことがない社会がやってきますので、それをどうするかといったときに、どういう解決ができるのかとか、AIが今私たちの意思がないところで動いてしまうかもしれないとかということがどんどん行われている中で、私たちが指示できないような中で子供たちは生きていきます。今は地域の課題解決なんですけど、それが生きていくために課題解決をしていくということにつながりますので、小・中、高校は高校なりにその地域からのいろんなこと、目に見えることから課題解決をしていけるとと思います。カリキュラムの中にどうやって入れるかは先生の力だと思います。そして、大学で力がある先生をどんどんつくってほしいんです。そのような先生を送り込んでください。よろしくお願いいたします。期待しております。

以上、補足でした。

(委員長)

かみしめなければいけないご示唆をいただいたと思います。

資料2のポンチ絵というか、教育理念の素案の下のほうに、高等学校像ということではありますが、生徒さんも先生方も意欲を持ってチャレンジできる学校ということで、その随分進んでいる事例、取組をご紹介いただけたのかなと思います。

また、本市では、学校運営協議会がしっかり位置付いたコミュニティ・スクール化がどんどん進んでいらっしゃるということを、今、ご意見としてうかがえたのかなと思います。

そのほかよろしいでしょうか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

それでは、本日予定されている協議事項につきまして全て終了しましたので、進行を事務局にお返しします。

(事務局)

すみません、皆さん様々のご意見ありがとうございました。

アンケート等について事務局からいろいろご説明をさせていただきましたが、資料1の

取組スケジュールについても一定に見直しをさせていただく可能性があるということをご了承いただけたらと思いますので、お願いいたします。

(委員長)

どこまでアンケートを広げていただくのかということと、スケジュールのこともまたご検討いただいておりますので、お願いいたします。よろしくお願ひ申し上げます。

(事務局)

委員長、ありがとうございました。

それでは最後に、教育長の高田からご挨拶申し上げます。

(教育長)

失礼いたします。

予定の時間をオーバーするまで、終始熱心にご議論いただきまして誠にありがとうございました。

今後の当委員会のスケジュールにつきましては、今、企画部長もご説明させていただきましたように、若干見直しをさせていただくこともあるかも分かりませんが、会議の中でもご説明いたしましたように、課題解決に向けての取組へもかなりスピード感も必要であるということも自覚をしております、先ほども電子メールを活用させていただくというようなことも申しましたけれども、できるだけ短い期間で検討をお願いし、意見をまとめていければという考えは持ち続けております。委員の皆様におかれましてはご苦労いただくことも多いかと思いますが、どうぞそのあたりのことをご理解いただきましてご協力いただければと思います。

また、資料2で説明をいたしました素案、竹原市の教育理念につきましては、これは最終的に県にお願いする要望の内容についての、いわゆるその根拠ともなるべきものとなるかと理解しております。本日提案させていただいた内容、皆様からのご意見を参考にさせていただきながら、より具体化できるようにブラッシュアップをしてみたい、こういうふうに思っております。

そして、アンケートの内容につきましては、会議の中でもご説明いたしました、回収率等を踏まえ、回答をいただく方の負担にならないように必要最小限の質問項目というこ

とを優先しておりましたが、それにしても矛盾等もありまして、たくさんのご指摘、ご示唆をいただきました。本日いただいたご意見を参考にするとともに、さらに配慮すべき事項等を精察して取り組んでまいりたいと思いますので、引き続きご指導のほうをよろしくお願いを申し上げます。

最後になりますが、この検討委員会につきましては、本市のまちづくりや未来を担う人材育成につながる教育環境の充実ということに対しまして極めて重要な役割を担っていただいているというふうに捉えております。竹原市が期待する、本市における高等学校像を明らかにして、県教育委員会に提案しながらその実現を図っていくという過程は、幾つもの困難を乗り越えていく行程であるということは理解しているつもりでございます。ですが、本市のまちづくり、本市の未来づくりのためにはどうしても通り抜けなくては行けない行程であるということも理解をしているところでございます。

スコット・フィッツジェラルドの著書グレート・ギャツビーの中の「だからこそ我々が前へ前へと進み続けるのだ、流れに立ち向かうボートのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも」という言葉を思い出しておりました。皆様からのご提言を力に、我々もしっかり前へ進んでまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

委員の皆様におかれましては、遅くまで熱心な議論をいただき、本当に感謝を申し上げます。今後も引き続き活発なご議論をお願いいたしたいと思います。遅くまで誠にありがとうございました。

(事務局)

ありがとうございました。

終わりに、事務局からの連絡事項をお伝えします。

次回の検討委員会は、8月を予定しております。それまでの間にアンケートの内容等について電子メールにてご確認いただく場合もあるかと思っておりますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

本日は長時間にわたりありがとうございました。